応用研究論文

秋田県立大学における「あきた地域学アドバンスト」の実践

COC＋事業に基づく地域に根ざした大学を目指して

荒樋豊 [1]，稲村理紗 [2]

[1] 秋田県立大学物資源科学部アグリビジネス学科

[2] 秋田県立大学生物資源科学部

本稿は，秋田県立大学において 2018（平成 30）年度に新設された「あきた地域学アドバンスト」という科目の特徴を検討するものである．これは，2017（平成 29）年 4 月から取り組まれているあきた地域学課程の中核科目として位置づけられる．「地域」への学生の興味･関心を惹起させ，地域・地方社会の魅力を伝えることを教育目標とし，講義，現地研修〔美郷町〕，ワークショップ手法の活用，そしてプレゼンテーションという 4 つの要素で構成されるユニークな科目である．とくに，現地研修は 2 泊 3 日を使った現地探索調査を内容とし，ワークショップは現地情報を踏まえた元気づくりポスターの制作を内実とし，プレゼンテーションでは研修先の地域住民への成果報告をおこなうものである．この科目の全記録をフォローアップしながら，書き記し，学生の活動への関与や受講後感想などに基づき，「あきた地域学アドバンスト」という科目のもつ教育的な可能性と課題を考察する．

キーワード： あきた地域学アドバンスト，あきた地域学課程，現地研修，ワークショップ型授業

今日，時代の変化を受けて，大学改革の動きが展開している．特に近年，文部科学省から支援施策（現代 GP，グローバル COE，COC，COC+など）が進められ，既存大学においてもそれぞれに独自色を持った魅力ある大学に変化することが求められている．

秋田県立大学では，平成 27（2015）年度から，COC 認定を受けて，「知の拠点（COC＋事業）」に取り組んでいる．本学では，学生の地元への興味・関心を醸成するため，「あきた地域学課程」の新設など教育カリキュラムの改善と，学生の地元への就職活動の促進のため，ジョブシャドゥイング等のインターンシップ体制などの充実を鋭意進めている．

本稿では，秋田県立大学の「あきた地域学課程」の中核に位置する「あきた地域学アドバンスト」という新設科目について検討するものである．

Ⅰ　本学における「あきた地域学課程」

秋田県立大学は，理系大学であり，高度な科学技術教育を特徴とするものであるが，それに加えて，キャンパスを飛び出し，具体的な地域課題に触れ，その対処方策を考察するという，地域に学ぶ教育システムをも整備しようとしている．具体的には，地域の現場に赴き，住民や関係者の声に耳を傾け，地元企業の特徴的な妙技を目にする機会を提供し，秋田という地方社会に潜んでいる価値の発掘などを目指すものである．

これにより，グローバルで普遍的な，大学の提供する「知の体系」を，企業等が存立する具体的な現実社会での柔軟な応用に結び付ける現場応答力を育むとともに，郷土ないしふるさとへの慈しみの心を醸成し，地域を悩ませている諸課題を析出し，地元において自分の果たしうる目標づくりや開拓する意欲形成など，地域貢献の能力向上をも視野に入れて

責任著者連絡先：荒樋豊　〒010-0444 南秋田郡大潟村字南 2-2　公立大学法人秋田県立大学生物資源科学部アグリビジネス学科．
E-mail: arahi@akita-pu.ac.jp

いる．

この趣旨を教育システムとして具体化するため，秋田県立大学を構成する生物資源科学部とシステム科学技術学部，2 つの学部において，「あきた地域学課程」という新たな認証制度を整備している．2015（平成 27）年度から 2016（平成 28）年度にかけて制度設計をおこない，2017（平成 29）年度から，「あきた地域学」という全学必修（1 年生対象）の新設科目をスタートさせている．

この新設科目を受けた後，2 年次以降に，地域に関係する科目群からの必修・選択にて所定の単位をとることで，地域創生推進士（秋田県立大学）の認証を授与する教育システムである．この地域創生推進士には，標準，上級，エキスパートの 3 つのランクが用意されており，上級以上を目指す学生には，「あきた地域学アドバンスト」の履修が義務づけられる．

本稿で紹介する「あきた地域学アドバンスト」という科目は，システム科学技術学部においても独自に整備されているが，本稿では，生物資源科学部における取組実践に限定して報告する．

Ⅱ　「あきた地域学アドバンスト」という科目

１．その特徴

「あきた地域学アドバンスト」では，次のような教育目標を掲げている.「私たちが暮らす秋田に目を向け，秋田の歴史，現状の基礎的事項を理解し，将来に向けた課題と今後の地域のあり方に対する視座を身につける」ことを授業目標とし，到達目標として 3 点を挙げている．

第一に，秋田県内の地域特性と地元の人々を理解し，地域課題を考えるためのベースとなる知識と情報収集力を身につけること，第二に，上記第一で身に付けた知識や情報を活用し，地域の活性化のために必要な方策を構築できる能力を身につけること，そして第三に，上記第二で構築した方策を自分なりの考えで説明しプレゼンテーションできる技能を身につけることである．

これを遂行するため, 充実した現地研修を用意し，ワークショップ手法を最大限に活用する，ワークショップ型授業を展開する．

なお，本科目は 2 泊 3 日の現地研修を伴うことから，夏季休暇中に，2018（平成 30）年 9 月 10～15 日と 9 月 29 日に集中講義の形で実施した. 今回の履修学生は，生物生産科学学科から 3 名，生物環境科学科から 6 名，アグリビジネス学科から 6 名の，計 15 名である．

２．その授業構成

表 1 にみるように，この科目の授業構成は，次のような特徴を有している.「あきた地域学アドバンスト」という科目は，2 年生以上を対象とする科目であり，「あきた地域学」の発展科目であることから，「地域」への理解をより一層深めるため，専門的な色彩を強め，文字媒体での地域情報の把握にとどまらず，具体的な地域社会に赴き，現場実情に触れ，自分の目で確認し，住民等への聞き取り調査をおこない，さらには収集した情報から課題解決策を考案することをテーマとしている．

授業内容としては，講義，現地研修，ワークショップ，プレゼンテーションという 4 つの要素で構成されている．

写真 1　**最初の授業風景**

構成要素の一つ目である講義では，現地研修の事前準備として, 研修対象地の状況把握, 研修の心得, 研修テーマの設定などについて検討する．

二つ目の現地研修において，学生が研修テーマに即したチーム編成をなして，市役所や住民への訪問を重ねながら，地域情報の収集（聞き取りなど）を

表１　「あきた地域学アドバンスト」の授業構成

	9月10日(月)　於：秋田キャンパス			
講義		第1回	ガイダンス（授業目的、進め方など）	荒樋
		第2回	訪問先に関する事前学修	金田・荒樋
		第3回	現地研修の調査設計	荒樋・稲村
	9月11日(火)　於：美郷町			
現地研修		第4回	美郷町の概要把握	荒樋・稲村・現地講師
		第5回	チーム毎の現地探索（写真撮影）	荒樋・稲村・現地講師
	9月12日(水)　於：美郷町			
		第6回	現地探索：聞き取り取材（1）	荒樋・稲村
		第7回	現地探索：聞き取り取材（2）	荒樋・稲村・現地講師
	9月13日(木)　於：美郷町			
		第8回	現地探索：聞き取り取材（3）	荒樋・稲村
		第9回	現地探索：聞き取り取材（4）	荒樋・稲村・現地講師
ワークショップ	9月14日(金)　於：秋田キャンパス			
		第10回	ワークショップ（目的：プレゼン資料の作成1）	荒樋・稲村
		第11回	ワークショップ（取材情報の分析・整理）	荒樋・稲村
	9月15日(土)　於：秋田キャンパス			
		第12回	ワークショップ（ポスター制作）	荒樋・稲村
		第13回	ワークショップ（ポスターに連動したシナリオ制作」）	荒樋・稲村
発表	9月29日(土)　於：秋田キャンパス			
		第14回	成果発表会（タウン・ミーティング）	金田・荒樋・稲村
		第15回	本研修のまとめ、レポート作成	荒樋・稲村

おこない，現場の声に触れる．

三つ目のワークショップにおいて，収集した地域情報を持ち帰り，課題解決策の検討やそれを表出するためのポスター制作及びプレゼン原稿の作成をおこなう．

四つ目の発表においては，研修先の地域住民の参加を募り，学生プレゼンテーション（地域の印象表出や地域課題の解決試案の提示）を実施する．

講師陣としては、生物資源科学部長の金田吉弘教授とアグリビジネス学科の荒樋豊教授に加えて、ワークショップ手法に造詣の深い稲村理紗特別講師によって担当している．また，現地指導講師として，秋田花まるっグリーン・ツーリズム推進協議会の藤原絹子女史と柴田桂子女史が加わった．

以下に，本科目の 7 日間の実施状況を記す．

Ⅲ　「あきた地域学アドバンスト」実施状況 ＜1 日目＞（秋田キャンパスにて）

１．ガイダンス及び現地研修に向けた心構え

第 1 日目の 1 限目に, 15 名の履修学生に対して「あきた地域学アドバンスト」という新設科目の概要説明をおこなった．ポイントは，次の 3 点である．

第 1 に,「地域」・「ふるさと」ということを正面から考える力を培うこと, そして「地域の元気づくり」に関係する手法を身につけることが，本科目のテーマであること，第 2 に，キャンパス内での講義，現地研修先でのフィールド・サーベイ，収集した情報の整理のためのワークショップの実施，プレゼンテーション開催によって構成されること，第 3 に,「地域創生推進士（秋田県立大学・上級ないしエキスパート)」という認定を得るための必須科目であること, である．また，授業の進め方や評価方法についてもアナウンスをおこなっている．

2 限目には，次のような 3 つのテーマに即した授業をおこなった．

一つには，訪問先探索ための事前学習として，美郷町の特徴点を紹介し，学生の訪問先理解を促したことである．美郷町の世帯・人口の推移，平成の町村合併の実施状況，町の立地条件，農業・工業・商工業の今日的な実情，町の名所や観光施設の整備状況，町の祭事などにつき，統計資料などを使って学生との間で議論している．

二つには，地方社会は総じて人口減少，高齢化，地域産業の衰退という共通の問題を抱えており，この克服に向けて，住民及び町行政は地域活性化の実

践を懸命に展開していることを確認するとともに，学生関与の可能性にも言及している．

後者については，住民実践において外部者の，あるいは若者の目線が比較的希薄であることが少なくないため，学生による実現可能なアイデア提示が求められるという点の説明である．「現場を見て学ぶ，先入観を捨てる，対等な関係で情報収集する」ことに心がけて，地域課題探しにチャレンジすることは意味あるものであることを学生に伝えた．

三つには，見聞きした地域の情報を整理してプレゼン資料に仕上げることを想定して，地域探索に臨まなければならない，ということである．本科目では，プレゼン資料としてポスター制作を構想している旨を紹介し，＜美郷町を元気にするポスター＞とは何なのか，を検討した．地域を特徴づける，あるいは印象に残る風景やもの・ことの発見・発掘，そして提案内容が学生の自己満足にとどまらないこと等の留意点を伝えるとともに，ポスター作成のポイントとして，ひとめ見て理解してもらうには，文字情報だけでは不十分であり，図や絵を最大限に活用した作品が効果的であること等の話し合いをおこなった．

２．現地研修のためのチームづくりと調査設計

第 1 日目の午後を使って，現地研修のための調査設計を，チーム単位でのワークショップを活用して実施した．以下に，ワークショップの手順に沿って活動記録を記す．

ワークショップ・オリエンテーション.

第一ステップとして，ワークショップのオリエンテーションの意味合いで，履修学生の心を和ませるゲームからスタートさせている. 履修生 15 名全員が椅子のみで円形に着席. お互い顔を合わせながら「手上げ式アンケート」をおこなった．

講師から提示される 2 択の質問に対し，グーかパーを一斉に挙げて意思表示をするもので，選択した内容につき何名かの学生に質問をしながら，お互いの理解を促しつつリラックスした雰囲気づくり（アイスブレイク）をおこなった. 参加学生については，積極的な学生と自己主張が控えめな学生半々の印象を受けた．

◎質問の内容（グーとパーで選択）

①「秋田市出身です」・「市外出身です」

②「秋田県出身です」・「県外出身です」

③「美郷町に行ったことがあります」・「美郷町に行くのは初めてです」

④「グループワークで話すのは得意です」・「グループワークで話すのは控えめです」

⑤「ワークショップに参加経験があります」・「ワークショップへの参加は初めてです」

本授業はチームによる協働作業によって進めるため,「ワークショップ」の意味や意義についてスライドで確認した．

ワークショップとは，主体的に参加したメンバーが協働体験を通じて多様な視点や考え方に触れ，相互に刺激を受け，創造的なアイデアや気づきを生み出していく「場」のことを指し，日本語では「工房」とも訳される．

「工房」の対にある「工場」は，事前に造られるものが決まっており，同じものをいかに迅速に正確に作るかが重要であるが,「工房」はその場に集まった人や材料によって試行錯誤の中からその都度違った作品が生み出される．本授業でも，誰とチームになるか, 現地調査でどのような情報を収集できるか, その組み合わせによって，生み出されるアイデアも多様なものになる．

ワークショップは一人ひとりの主体的な参加と，対話における対等性を前提にしているため，心得として以下の 3 つ項目を提示した．

① 思ったこと，感じたことを遠慮しないで素直に表現する．

② 自分と違う意見にも耳を傾け，発言の背景に思いを巡らせる．

③ チームで挑むことを大切にする．

単純な人の集まりを意味する「グループ」とは違い,「チーム」は目的を共有し，達成のために力を合わせて動く集団を指すものであり，授業を通じてチームワークを育んでもらいたいとの旨を説明した．

自己紹介ゲーム.

第二ステップとして,「4 つの窓」の手法による自

己紹介をおこなった．各自にクリップボードに挟んだ A4 版の白紙と太字の水性マーカーを配布する．用紙の縦と横の中央に十字に線を引いて 4 つに区切り，各マスに以下の項目についてマーカーで簡潔に書き，自己紹介シートを作成した．

自己紹介シートの項目
1. 名前と読んでほしいあだ名
2. 所属
3. 特技や好きなこと
4. この夏印象的だった出来事

作成した自己紹介シートを持って各自席を立ち，面識の薄い人と 3 人組をつくり，シートを相手にみせて 2 分間で読み上げながら交代で自己紹介をするものである．メンバーを変えて 2 セット実施した．お互いの人となりが垣間見えたことで，場の雰囲気が少しほぐれた．

インタビューゲーム.

第三ステップとして，インタビューゲームを実施した．明日以降の現地研修において，「質問する」という練習は不可欠な要素である．

2 人組をつくり，ワークシートを使ったインタビューゲームを開始した．相手の特技や趣味，今回の授業に期待していること，現在関心があることなどについて 10 分間交代でインタビューをおこない，聞き出した要点のメモを元に相手の紹介文を 20 分間で作成，読み上げて全体に発表するというものである．偶数人数であったため，1 名の学生は講師とペアを組んでおこなった．

***写真 2*　ワークショップの風景**

インタビューゲームを通じて，授業に参加しているメンバー同士の理解を深め，チーム分けの際の参考情報を探るとともに，今後のワークショップや現地調査で地域の方々に聞き取りをおこなうにあたって必要な，「話す」「聴く」「たずねる」「書き出す」というトレーニングも兼ねた．また，インタビューゲームをおこなう際，以下の心得を提示した．

◎インタビューゲームの心得
・インタビューをする側は…
1. 相手が話しやすい質問をする．
2. 相手の個性や良い所を引き出す．
3. じっくりと相手の発言に耳を傾ける．
・インタビューを受ける側は…
1. 飾らず率直に話す．
2. 答えたくないことは答えなくて良い．
3. 話したいことがあれば積極的に話す．

各自紹介文を作成後，全員で椅子のみで円形に着席し，作成した文章を読み上げて，ペアになった学生を紹介した．紹介文から学生の個性が見え，学生同士も講師の学生に対する理解も進んだ．また，インタビューシートは，授業終了後に回収し人数分印刷し．翌日美郷町に移動するバス内で配布し，移動中にじっくりと目を通す時間を設けた．

研修チームの編成.

第四ステップとして,「チーム分け」をおこなった．以下の 3 つのテーマをホワイトボードに板書して提示．各自四角い付せんに自分の名前を書いて，希望のテーマに添付しグループ分けをおこなった．

各チームのテーマは，以下の通り．

① 農業…美郷町の農業を強化する（稲と複合経営の展開，生薬栽培の可能性）
② まちづくり…美郷町のまちづくりを進める（「六郷のまちなかプロジェクト」，六郷の商工業の展開，「古い街」の資源活用）
③ 観光…美郷町の特徴を活かす（清水の観光開発化，交流人口拡大のための情報発信）

各グループ 5 名定員のなか,「まちづくり」チームは男 3 名女 2 名で確定したが,「農業」チームは男 3 名,「観光」チームは男 4 名女 3 名の計 7 名と偏りが

出た.「観光」はテーマの取り掛かりやすさと，普段から親しくしている学生が複数人まとまり希望者が多くなった.

チーム規模の均等化のため，講師から「話し合いで２名が農業チームに移動すること」「普段とは違う顔ぶれでチームを組んだほうが，新しい気づきやアイデアが生まれやすい」と声がけをしたが決着せず，最終的にじゃんけんで負けた 2 名の女子が農業チームに移動をした．移動した 2 名の女子は不服そうであったが，ワークショップや現地調査が進むにつれ良い変化が見られたので後述する．チーム編成後，自薦他薦で各チームのリーダーを決定した.

聞き取り調査票の作成.

第五ステップとして，具体的な現地調査設計に進む．チームごとに，研修第 1 日目の午後に予定されている「景色写真撮影」につき，訪れたい場所を話し合い, 研修第 2〜3 日目に予定されている聞き取り調査対象者への質問事項について検討した.

農業チームにおいては，町役場の農政課のほかに町役場から紹介を受けた専業農家 FY 氏，生薬農家 KM 氏と TS 氏への質問項目を作成した.

まちづくりチームでは, 町役場商工観光交流課（交流班）と地元コミュニティ新聞の SM 氏,「夜市」の運営者 UK 氏，介護福祉センターの TG 氏，商店の KS 氏と KM 氏，みさと JAZZ オーケストラの SH 氏への質問を構想した.

観光チームでは, 町役場商工観光交流課（観光班）に加え，六郷まちづくり(株)の OS 氏，町観光協会の KK 氏，清水案内人の SK 氏の質問を用意した.

チームごとに，訪れたい場所や知りたいことを，各自四角い付箋 1 枚に 1 つの項目を 10 分間で複数枚書き出し，テーブルの上に広げた模造紙に 1 枚ずつ読み上げて添付．似たような内容の付箋をまとめてグループ化し，チーム内で共有した.

Ⅳ　「あきた地域学アドバンスト」実施状況 ＜２日目＞（現地研修一日目）

集中講義の 2 日目は，現地研修への移動から始まった．朝，秋田県立大学秋田キャンパスから美郷町の宿泊施設ワクアスに移動した．そして，午前 11 時から宿泊施設の会議室を使って，役場職員との顔合わせ，現地研修の心得などを確認する「はじまりの会」を開催している.

１．現地研修の開始（はじまりの会）

本研修の趣旨を再度確認した後，学生は一人ずつ名前と所属の学科を述べ，自己紹介をした．美郷町の現地調査には，5 名で構成する農業チーム・まちづくりチーム・観光チームに，それぞれ現地指導講師 1 名と院生のティーチングアシスタントないしピアチューター1 名を配している．加えて，テーマの案内役として役場職員 1 名を各チームに配した.

午後からのテーマである現地の特徴的な事物・景色撮影について，現地を散策しながら景色写真の撮影の意義や散策の視点や方法について配布資料に基づいて説明をおこなった.

例えば，地域の自然環境はどのようなものか，暮らしにどう影響しているか，田畑では何が植えられているか，どんな植物や生き物が生息しているか．建築物や外壁，看板や標柱，通り全体の印象はどのようなものか．施設や店舗，公園等の公共の場はどのようなものがあるか，など.

◎散策の意義

1. テーマを意識した散策には新しい発見がある.
2. 複数人で散策すると，自分にはない視点や興味関心からの気づきがある.
3. 五感（視覚，聴覚，嗅覚，味覚，触覚）を使って散策することで地域を立体的に把握することができる.

◎「地域の宝物」を探す視点

…「地域の宝物」とは，地域づくりの種となる地域資源のこと．すでに輝いているものや磨くと光るもの，その地域固有の有形無形のものを指す.

◎散策の方法

1. 散策して見つけたものや気づいたことを，各自メモをとりながら歩く.
2. インタビューできそうな人がいたら話を聞い

てみる．

3. 目にとまった場所の写真を，各自のスマートフォンやデジタルカメラで撮影する．
4. 個人行動ではなく，チームを意識して散策する．

◎散策の際のエチケット

1. 安全に配慮する．
2. 通行人のじゃまにならないようにする．
3. 私有地に無断で入らない．
4. 出会った地域の人に挨拶をする．
5. インタビューをする際は，授業の目的を先に伝える．

地域の資源は住む人にとっては身近すぎて，美しさや面白さなどの価値を感じにくくなっている場合もある．学生の新鮮な目で地域を見て，資源の再発見をして欲しい旨の解説をおこなった．

２．地域景観などの写真撮影

上のような現地での打ち合わせの後，最初のフィールドワークは，チームのテーマに沿って，美郷町内各地での現地散策である．

農業チームは，農業状況を掴むため，車を使って町内全域の散策を試みた．町を代表するラベンダー公園を経由して，大台野からの町の全景を望んだ．一面に広がる水田の風景に感嘆するとともに，水田単作からの脱却という今日的なテーマへの関心を高めることにもなった．また，千畑地区にある松・杉並木も見学した．

観光チームは，六郷地区を中心に，観光資源の存在状況を確認した．美郷町は，奥羽山脈からの浸透水に恵まれ，水田農業の拠点であるとともに，湧水の里としても有名である．

美郷町を象徴するこの水に関して，酒造蔵の仕込み水，六郷地区を中心に数多く存在する清水（シズ）を調べ歩いた．奥羽山脈に浸透した湧水の清らかさに感嘆した．その他，お寺の里としても知られていることから，いくつかの寺院を訪問し，境内の幽玄な雰囲気を味わってもみた．

そして，まちづくりチームは，観光チームと重なりながら，六郷地区のまちづくり状況の把握を目指した．観光拠点になっているニテコ名水庵，手作り工房「湧子ちゃん」，美郷町歴史民俗資料館等も訪ねている．

３．地域探索の振り返り

研修の最初の日は，16 時 30 分を目途に散策を終え，宿泊所であるワクアスの会議室に集合した．チームごとに集まり，調査ノートを元にして，チーム散策を振り返った．

机を中心にチームメンバーが集まり，各自 A4 の用紙を，散策での個々の気づきをマーカーで箇条書きに記した．そして，チーム内で読み上げてメンバーでの共有を図った．また，明日の聞き取り調査での質問事項について再検討をおこなった．

写真 3　美郷町のラベンダー園

写真 4　お酒づくりの仕込み水

写真 5　**六郷地区の清水（シズ）**

Ⅴ　「あきた地域学アドバンスト」実施状況 ＜３日目＞（現地研修二日目）

この日から，町役場や関係機関，さらには住民への本格的な聞き取り調査を開始している．まず，3つのチームが町役場の会議室に集合し，その後，テーマに沿った情報収集をおこなった．

以下に，代表して，観光チームの聞き取りの様子を記してみる．

１．聞き取り状況：観光チームの場合

観光チームでは，観光商工交流課観光班の班長から美郷町の観光振興の課題について説明と，学生からの質問への回答を得た．概要を以下に記す．

「清水の郷」美郷町は，「いやしの町　にぎわいの郷　豊かさを実感できるまち」をスローガンに，町内に 126 ヶ所に湧いている清水を観光資源の主にしている．市民ボランティアによる散策ガイド，民間による観光拠点施設や景観整備，清水を活用した商品開発，ゆるキャラ「ミズモ」によるＰＲなど，官民をあげて清水による観光振興を展開している．

冬場の催しとしては，小正月行事「六郷のカマクラ」があり，国指定重要無形民俗文化財に指定され，「竹うち」行事として広く知られている．

6 月中旬～7 月中旬にかけて，ラベンダー園で「ラベンダーまつり」が開催される．通常の紫色のラベンダーの他，園で発見されたホワイトラベンダーが「美郷雪華」として品種登録．美郷町がオリジナル品種を保有することになり，美郷雪華のルームフレグランスや酵母を使った日本酒等の商品が開発されている，等の情報を得ることができた．

六郷まちづくり株式会社での聞き取りでは，この組織が，1999（平成 11）年に設立され，同年にＴＭＯ（タウンマネージメント機関）認定．「六郷商業者タウンマネージメント構想」を策定し，「手作り工房湧子ちゃん」，「名水市場湧太郎」を運営していることを学んだ．

「手作り工房湧子ちゃん」では，清水を使ったニテコサイダーや豆腐，おからドーナツを販売し，好評を得ている．「名水市場湧太郎」は，明治 30 年に建築された旧「國之譽」の酒造を改修した多目的施設である．

続いて，「手作り工房湧子ちゃん」に移動．ニテコサイダー製造管理主任の AN 氏の案内で工場見学をおこなった後，現在開発中のサイダーを試飲．また，新商品の小粒タイプのおからドーナツも試食させていただいた．

町の方々と学生とのやりとりで特徴的であったのは，寺院はタイ人に人気があるので，SNS（ソーシャルネットワークサービス）を活用してＰＲしてはどうか，サイダー以外にも，水そのものの美味しさを実感してもらうため，美郷の米と水をセットにして販売してはどうか，などの提案があった．

聞き取り調査では，学生ひとり一人が質問をし，発言をして，熱心にメモを取る意欲的な姿がみられ

写真 6　**訪問先での聞き取り調査**

た．その後，美郷町観光情報センター等の聞き取り調査に臨んだ．

類似の形で，農業チーム，まちづくりチームも予定された調査対象者を訪問した．多様な情報の収集に努めた．

２．聞き取り調査の振り返りと報告リハーサル

午前・午後にわたる現地での訪問調査を終え，各チームは 16 時 30 分を目途にワクアスに集合した．施設内会議室に，チームごとに集まり，聞き取り調査の振り返りをおこなった．

各自調査での聞き取り内容や気づきをA4 の用紙にマーカーで箇条書きにし，用紙をメンバーに見せながら読み上げ情報を共有した．

さらに，夕食後，再び会議室に集合し，聞き取り調査の振り返りでA4 の用紙に各自が書き出した内容をもとに，講師を報告する地域住民に見立てて，各チームからタウン・ミーティング時の最終発表に向けて, 中間的な報告のリハーサルををおこなった．

3 つのチームから，それなりに興味深いアイデアが提示された．ただ，この中間的な発表の段階であるが，誰から聞いた情報であるのか，得た情報が確かなものであるのかなど，検討せねばならない点・明確にすべき点を厳密に考える必要があることを共有した．

「まちづくり」チームは,「まちづくり」という言葉が広範囲にわたるため，聞き取り内容の絞り込みに苦戦している様子がうかがえた.「観光」チームでは，新たな情報発信ツールに特化することの限界性が，地元住民への納得が得られるのかといった不安の声が聞かれた．

この振り返りの総括として，提案しようとするアイデア（ポスターや発表原稿）が，学生の自己満足で終わっては，タウン・ミーティングのような形での住民への発表に耐えられない旨の説明をおこなった．

Ⅵ　「あきた地域学アドバンスト」実施状況 ＜４日目＞（現地研修三日目）

午前中は，昨日に続き，現地の聞き取り対象者を訪問し，チーム毎にそれぞれの調査を遂行した．

１．現地調査で得た情報の整理

昼食後に，各チームが美郷町役場に集合した．役場会議室において，チームごとに，3 日間の現地調査で得た情報の整理を試みた．

付箋を使った情報集約の手法を用い，以下の行程で情報を整理，共有した．各チームとメンバーに 3 色の付箋を複数枚配布した．

ピンク色の付箋には「見つけた地域の資源や良いと感じたこと」, 水色の付箋には「課題に感じたことや改善が必要と感じたこと」, 黄色の付箋には「更なる情報収集が必要なこと」について，1 枚につき一つの項目を 15 分間で書き出し, 付箋を読み上げてチーム内で共有しながら，模造紙にまとめた．

単純な項目ごとの分類ではなく，付箋に書かれた内容を吟味し，意味合いの繋がりを見つけて統合文（見出し）をつける「集類」と呼ばれる思考方法によってまとめた．そして，付箋ごとの関係性を矢印でつなぎ，収集した多様な情報を構造化した．情報の整理後，各グループに引率した講師からコメントやアドバイスをもらい，今後の提案策に向けて構想を練った．

写真 7　チーム毎の聞き取り情報の整理

２．チーム活動の様子

現地研修三日目の学生たちの様子につき、特徴的な点を記しておく．

終日にわたる現地調査への慣れのなさもあって, 2 日目と比較し，疲労で作業効率が落ちている学生も数名みられた．

一方では，従来から仲間同士で構成されたチームでは，聞き取りやまとめをメンバーに任せてしまう甘えが出た学生もいた．

他方で，希望外のテーマに割り振りされ普段の仲間ではない面々とチームになった所では，テーマへの接近を唯一の絆としたことで良い緊張感が生まれるのであろうか，授業当初から比較して参加の意欲が向上している学生の姿がみられた．

午後 3 時に，お世話になった美郷町役場を立ち，秋田キャンパスへの帰路についた．

Ⅶ　「あきた地域学アドバンスト」実施状況 ＜５日目＞（秋田キャンパスにて）

当該集中講義の 5 日目，この日は，秋田キャンパスを会場にして，午前中に現地研修の振り返りをおこないつつ，プレゼンテーションのためのポスター制作を開始した．

１．現地研修の振り返り

1 限目は，秋田キャンパスでの講義から開始された．比較的長期の現地研修もあって，学生による関心のブレが想定できたことから，本講義の趣旨を確認することから始まった．本集中講義の第 1 日目に学生に説明した内容を再度繰り返した. すなわち「地域学アドバンスト」の教育的テーマは「地域を理解する」ことであり，1 日目の現地調査の心得として示したのは「①自分の目で見て学ぶ．②先入観を捨てる. ③対等の聞き取りをする.」というものである．

現地調査では，単に聞き取り調査一辺倒にならないように，獲得した多様な情報をできるだけ速やかに整理し，キーワードのグループ化に努めてきた．結果として，各チームにおいてテーマに対するイメージの拡張と訴求すべき事柄について絞り込めてきた．

よって，本日と明日の 2 日間で，各自・各チームが「どのように地域を理解したか」を集約し，1 枚のポスターに仕上げるという作業に取り組むことになる. 9 月 29 日に予定されている美郷町の住民の皆さんを招いておこなわれる「タウン・ミーティング」において，制作したポスターを用いてチームの提案を学生が発表せねばならない．

発表の原稿作成とリハーサルは，明日の午後に予定する．人は，論理だけでも感情だけでも納得ができない. ポスターという「絵」「キャッチコピー」と，発表原稿による「文字」の両輪で訴求を図る．美郷町の方々の心をつかみ, 元気づける提案になるよう，一人ひとりの感性の発揮に努める．これが目指す目標である．

制作にあたって，常識的規範に従うことと，制作物・作品には，社会的責任を伴うことを意識することが求められる．また，出会った地元の方々は聞き取り調査の実験のようなサンプルではない．ポスターの表現や提案内容が相手の尊厳を傷つけることの無いよう，敬意を持って制作にあたること等を，担当講師は学生への指導ポイントとして指摘した．

ポスター制作に当たって，何か見本になるようなものが必要ではないかと考え，サンプルとして，某大学の学生チームが制作したポスター2 枚を紹介した．

まず,「どのように地域を理解したか？」の集約である．とくに,「どのように」の中身を明確にせねばならない．そこで，具体的に，チームでの作業を促すため，メンバーに対して「君はテーマに沿って美郷町をどのように捉えたのか」という問いかけを機軸としたグループインタビューの手法により，情報の分析と絞り込みをおこなった．

部屋の壁に模造紙を貼り，模造紙の前に椅子のみで扇形に着席．インタビューを受ける人 1 名，発言の要点を模造紙にマーカーで板書する人 1 名を選出し，他 3 名はインタビュアーとして,「どのように地

写真 8　収集した情報の整理の様子

域を理解したか？」をテーマに 10 分間のインタビューを実施している．現地調査で得た情報から各自が感じた資源や課題, 資源を活かしたまちの未来像や, 課題が深刻化したまちの未来像などを話題とした．10 分間で，話し手と板書を交代し，全員がすべての役を担った．

全員のインタビュー終了後，板書された情報の中から一人 3 ヶ所，重要と思う項目にカラーのマーカーで線を引き，提案内容の絞り込みをおこなった．

グループインタビューでは，各自が積極的に自分の考えを自分の言葉で述べ，互いの発言に耳を傾けながら建設的な対話をする姿がみられた．授業初回では消極的に見えた学生も臆せず口頭で自分の想いを話しており，短期間ではあるがワークショップや現地調査での聞き取りによるトレーニング効果が実感できた．

２．提案策の企画及びポスター制作

次に，提案策の企画とポスター制作である．研究先でのグループインタビューで絞り込んだ内容を元にしつつ，学生個々人のアイデアを活用しながら，提案策の企画を煮詰めた．口頭や付箋を使った意見交換を経て，模造紙に，①提案策のタイトル，②提案に至った背景，③提案策の概要，④提案策の担い手，⑤提案に係る予算，⑥提案の詳細について簡潔な文章でまとめた．

その後，ポスター制作に入る．各チーム企画案の作成後, ポスター制作を開始した. 使用した道具は, 模造紙，水性太字カラーマーカー，色鉛筆である．休憩は進捗状況に合わせチームごとに適宜とるように説明した．

1 枚のポスターを 5 人で制作するにあたり，書き出しまでに想定以上の時間を要してしまった．授業初回の自己紹介で絵が得意だと話していた学生は，こだわりから描き進めることができず，翌日に持ち越したケースもみられた．

また，ポスターに即したシナリオ（発表原稿）づくりも，案外難しいものであることを学生は理解することになった. 次年度に向けた課題の一つとして, ポスター制作への誘導の方策を詰める必要を感じている．

Ⅷ　「あきた地域学アドバンスト」実施状況 ＜６日目＞（秋田キャンパスにて）

昨日に引き続き，チームごとにポスターの制作に集中した．今回の制作したポスターは，9 月 29 日のタウン・ミーティングで発表するほか，美郷町のご厚意で 10 月 28 日に開催される「美郷フェスタ 2018」の会場にブースを設けて展示されることが決まっている．ポスター制作を担う学生にはプレッシャーがかかっていた．しかし，他方で目標が決まった以上，「住民の方々へのしっかりした成果を出さねばならない」と自らを鼓舞する姿もみられた．

担当講師からは，次のような指示が出された．すなわち,「上手にみえなくとも手書きで作成することにより，作品に「味」や「温かみが出ること」,「キャッチコピーを入れること」,「美郷町であると一目でわかる絵や表現を入れること」,「離れて見ても文字が読めるよう，できるだけ太い線を使って描くこと」などが補足的に説明された．

2 つのチームでは，キャッチコピーのフォントを整えるため，パソコンルームで大きな文字で打ったフォントを印刷し，それを元にキャッチコピーを書き入れるといった几帳面な作業がみられ，さらにポスター制作の時間を要することになった．

悪戦苦闘をしつつも，写真 10～写真 12 にみるような作品が完成した．ポスター完成後，発表原稿の作成に移った．

発表原稿の要点を記した模造紙をポスターと並列して展示する予定で作業を進めていたが，時間がおしたため文字原稿のみの作成に変更した．原稿の整備が 7 ～8 割程度になった時点で，チームごとに発表のリハーサルを実施した. 制限時間の 10 分間を計って，プレゼンテーションをおこなった．

担当講師から，不足している視点や改善点などのアドバイスを受けながら，学生はそれらへの対応に努めた．特に，本番では，メンバー全員で発表をおこなうこと，なるべく原稿を見ないで話すこととの補足があった．

Ⅸ　タウン・ミーティング（成果発表会）
＜７日目＞（秋田キャンパスにて）

本科目「あきた地域学アドバンスト」の総まとめの意味をもたせて，9 月 29 日（土）にタウン・ミーティング（成果発表会）を開催した．会場は秋田キャンパスである．研修時に聞き取り対象者になって

写真 9　**タウン・ミーティングの開催**

いただいた地域住民 6 名と役場職員 5 名の参加を得た．これら美郷町の方々に対して，学生が今回の研修の学んだ成果の発表するものである．

以下に，各チームの発表内容の概略を記す．

観光チームの発表内容

観光チームの発表タイトルは,「世界に広がれ　美郷町」である．提案内容は，SNS（ソーシャルネットワークサービス）の 1 種であるインスタグラムを活用し，美郷町が持つ，今ある観光資源の魅力を新しい方法で発信するというものである．

すでに美郷町でもフェイスブックや Twitter のアカウントを作成し，実際に町の宣伝活動をされているが，インスタグラムはおこなっていない．SNS の中で最近勢いがあるのはインスタグラムである．インスタグラムは，写真や動画での発信力が強い．それでは，我々がこの新しい宣伝方法の提案を構想したポイントは，経費をかけなくても済むという点である．

今回の研修，美郷町訪問によって，我々は美郷町の魅力を知った. その魅力は地元の人にとっては「あたりまえ」になりがちですが，観光客にとっては，

写真 10　**観光チームの作品**

仲間の伝えたい発見の連続でもあるということから，美郷町への訪問者の方々に，見るもの，聞くもの，味わうもの等を発信してもらうという方法があるのではないと考えるに至った．ラベンダー園，奥羽山脈，「天筆」という行事，諏訪神社，清水（シズ），「おからドーナツ」や「もちっとボール」，「仁手古サイダー」，「ミズモ」など，我々には魅力的な存在であった．

それでは，新企画として，具体的に何をするのか説明していきたい．最初に美郷町の役場の商工観光交流課の力を借りて，美郷町のインスタグラムを開設してもらう．そこで，ラベンダー園などのイベントの告知や，観光スポットの紹介，特産品のアピールやミズモの日常などの情報を発信してもらう．

次に，美郷町を訪れた観光客の方々に，美郷町の魅力（画像や動画など）をインスタグラムで発信してもらい，ハッシュタグを付けてもらう．ハッシュタグの設定により，同じキーワードでの投稿をすぐに検索できたり，趣味の似たユーザー同士で投稿を共有できたりもする．このような協力をいただいた方に対して，町からの特典を付けることも必要かもしれない．ただ，経費は発生するため，役場などでの検討を要する．

最後に，地元の高校生に授業の一環として，美郷町の魅力の発見・再発見をしてもらいながら，自ら

地域をインスタグラムで PR してもらうという取組も，町役場の働きかけによって可能なのではないだろうか．地域のことについて知ってもらうことは，直接的でないにせよ，若者の流出にも歯止めをかける可能性があるように感じ，本案を提案する．

これらの案のデメリットとして挙げられるのが発信した情報がインスタグラムをやっている人中心にしか伝わらず，高齢者などにまで情報が行き届かないという点である．しかし，このデメリットがあるにもかかわらず，この案を提案した理由は，パンフレットや新聞などの従来の宣伝方法での成果は見込めず，新たな挑戦が必要であると考えたからである．

まちづくりチームの発表内容

まちづくりチームは，「住みよいまちづくり」をテーマにしてみました．現在，町役場を中心に「まちなかエリア活性化構想」が進められている．これは，六郷地区での「にぎわい」創出を目的とするものである．

私たちは，この構想の重要性を認めつつも，違った観点から自分達らしい「まちづくり」を考えてみた．今から新しい商品やモノを作るのではなく，今あるものを活用した形で，外部との交流に力点を置くというものである．

ポスターでは，美郷町の理想と現実を「絵」にしてみた．

若い人達が県外や県の中心部への流出，高齢化の深まりという状況に中で，町に活気が失われてきている現状がある．しかし，研修のとき我々の感じた美郷町は，＜時の流れを感じにくいほどゆったりしていること＞，＜火災や水害などに強い点＞，＜人が住みやすい場所であるということ＞であった．

そこで美郷町の良いところをもっと PR していくこと，また PR をしても住む場所や訪れるお店がないと，美郷町に来られた人達は困惑するであろう．なので，現在使用されていない空き家などを活用して，訪問者の受け入れを可能にする空間整備をおこなう必要がある，と考えた．

これらを誰がおこなうのかという問題がある．町の住民全員が担うことができれば良いが，町の人全員の協力を取り付けることは難しく，中にはまちづくりを前向きに考えていない人もいるかも知れない．そこで，提携先の自治体・企業・団体と協力しながら，まずは美郷町役場が主導していく必要がある．

あるものの活用と美郷町 PR という観点から，いくつかの提案をする．

第一は，「建築物の明確化」である．歩いてくる人に見えやすい場所に店を設置する，加えて建物が看板の色を増やし，分かりやすさを出すというものである．レトロな町並みという現状を踏まえつつ，何の建物か分かりやすくなることから，訪問者が増えるのではないかと考えた．

第二に，「空き家のリノベーション」である．美郷町内にある空き家のすべてを新しいお店や住居にしてみるということ．このリノベーション計画については既に町内では動いているようだ．

第三に，「美郷ジャズオーケストラの前面化」である．美郷町を PR するのは，内部からの発信だけではなく，外部に出て美郷町を宣伝する必要があるとの観点に立てば，町外での演奏をしている美郷ジャズオーケストラは適任である．美郷ジャズオーケストラの方々に PR していただくために，町や地域住民から移動費や活動費を補助金として支援して，美郷ジャズオーケストラを前面的に出させれば良いのではないかと考えた．

第四に，「町ゼミの範囲の拡大」である．町ゼミと

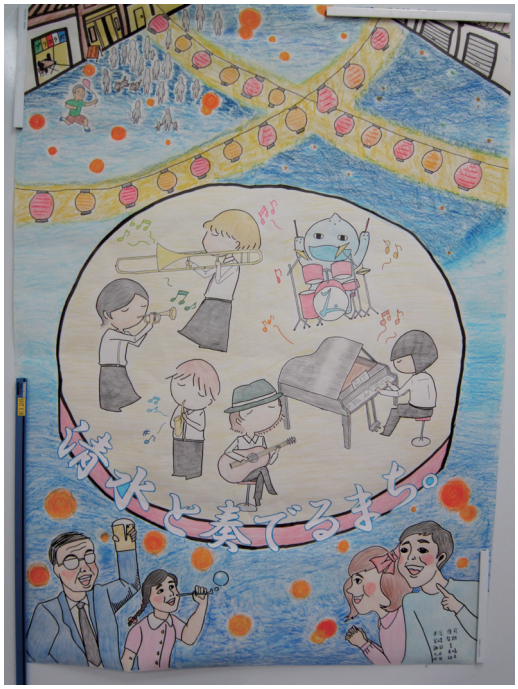

写真 11　**まちづくりチームの作品**

いう町民主催の取組がある．普段は体験することができないことや専門的な知識を町のお店の人が教えてくれるゼミのことであり，住民有志で実施されている．これをより情報発信力のあるものにするため，我々は次の提案をする．会場を美郷町体育館にして，5～8 店舗ほど集まって町ゼミを開催するという企画である．この取組が町の外の人に知れわたり，徐々に町外からの受講者（来訪者）が増えてくれば，大曲のイオンや秋田駅周辺を会場にする．このような住民の学びの場が，実は美郷町の魅力を発信する機会になると考えた．以上が，まちづくりチームの報告である．

農業チームの発表内容

農業チームの発表内容は，「生薬栽培の強化」ということである．美郷町の農業をみれば，大規模稲作経営，稲作と枝豆等の野菜作の複合経営など，自慢できる農業がたくさんあるが，将来の可能性の観点から，「生薬栽培」に注目する．

聞き取り調査によれば，国産生薬に対する需要見込みがあること，遊休農地の利活用，そして龍角散等の生薬会社とのつながりから，導入は図られているとのこと．

生薬栽培にはメリットとデメリットがある．メリットとしては，作付面積あたりの収入が良いこと，売り先が決まっていること，病虫害被害が少ないことなどであり，逆に，デメリットの面をみれば，機械化が難しいこと，栽培技術がまだ確立されていないことが指摘できるが，デメリットへの対策はすでに始まっている．

我々学生には考えもしなかった生薬であるけれど，「見る，触る，話を聞く」といった今回の研修を通し，生薬栽培へのイメージが膨らみ，親しみを感じるようになるという経験を実際にした．この経験は，生薬を町の特産品として確立し，地域に根付かせるためにも役立つと考えた．具体的には，「生薬」という名前だけではなく，効能や形態など「生薬」そのものについて住民の多くの方々に詳しくなってもらうことは第一歩ではないか，と考えた．

そこで，私たちは美郷町の生薬栽培を支えるために，2 つの提案をしたい．

写真 12　**農業チームの作品**

まず 1 つ目は，生薬のビデオを作ることである．「SHOUYAKU SHOW」という題名のビデオの主演は，美郷町のイメージキャラクターであるミズモとする．内容としては，龍角散の創製者である藤井玄淵さんが，タイムスリップして，ミズモと出会うところから始まる．喉が渇いていた藤井さんにニテコサイダーをあげてお話ししていたミズモは，龍角散の原材料である生薬を作る場所を日本で探しているということを聞く．そこで，美郷町を盛り上げたいミズモは，この町での生薬栽培をイメージし，提案する．「では，頼みました！」ということで，美郷町での生薬栽培が開始されるというお話である．

２つ目の提案は「生薬を地元住民の広める」ことである．「町で生薬を押していることは理解しているものの，生薬そのものについては深く知らない」という住民がいることを今回の研修で知った．また，町では生薬の勉強会を開催しているが，栽培を目指す農家に向けのもので，一般住民への周知は不十分な状況にある．

そこで，住民に対して生薬に親しみを感じてもらう企画があれば良いのではないかと考えた．小学校のふるさと学習の一環に位置づけることもイメージでき，美郷フェスタの中で「生薬に関するブース」を設置し，生薬料理を提供するなども考えられる．

これらの活動を通して，「美郷町に生薬あり」と地域住民に思わせることができるでしょう．そうなると，「うちでも生薬栽培してみよう」と考える農家が増えるという循環が構想できる．

最後に，美郷町の生薬栽培の象徴として，ポスタ

ーを作成した．国民的番組である「笑点」のオマージュである．アイデアの発端は，班員が「しょうやく」を「せいやく」と誤読していたのである．笑点で使われている言葉遊びを楽しく伝えれば，正しく読めるようになるのではないか，と考えた．生薬の「苦い」・「馴染みがない」といった若者の負のイメージを払拭するため，明るい色を多用し，親戚の孫が書いたような，親近感のあるポスターを目指して制作した．

学生発表への質疑応答

町役場や地域の方々から学んだ情報の整理であったが，ポスターに仕上げることによって，作品として学生の考えを伝えることが可能になった．参加いただいた美郷町の方々には学生の感性に直接触れる機会となり，学生にとっては自分たちのチームの作品を発表する真剣勝負の場になった．これら 3 つの発表のあと，参加者による質疑がおこなわれた．懸命な学生の発表を受けて，参加者からは，チームそれぞれに対して積極的な発言が続き，盛会裏に成果報告会を終えることができた．

このプレゼンテーションが終了した後，各チームに関与した参加者の方々が，発表の学生のところに駆け寄り，「よくやった！」「たいしたものだ！」と，肩をたたいて激励する姿もみられた．

写真 12 **成果報告会（Town Meeting）の様子**

X．受講生の感想

上のように，今年度実施した「あきた地域学アドバンスト」の一連の取組内容をみてきた．この科目を受講した学生は，教育内容をどのように捉えたのであろうか．この点を確認しておきたい．履修生の受講後レポートからみる．紙面の都合から，学生レポート 15 点のうち，特徴的な 5 点を要約の形で紹介する．

A さん：住民への周知の仕方としてのポスター

私は，この講義を受講して，自分ひとりでは得ることのできない意見・考えを知ることができました．私のチームは，美郷町農業の強化を考えました．役場での話しあいで，生薬栽培に注目することにし，直接農家訪問をして，課題や可能性に関する聞き取り調査をしました．

宿泊所に戻って，メモを見返している時点では得られた情報が頭の中で点在していたのですが，チームでのワークショップのなかで，赤・青・黄色の付箋を使って，良いところ，改善点，さらに知りたいことなどに整理しているとき，点在していた一つひとつの情報が結びつき，自分の理解が深まる実感を得ることができました．

私は，意外な切り口を提案することが得意ですが，そのアイデアの内容を具体的に詰めていくことが苦手です．そこで，発表シナリオは仲間に任せて，自分はイメージをそのまま絵にできるポスター作成を担いました．

私たちの提案の基本スタンスは，「生薬」を町民の方々に広く知ってもらうことでした．ただ，この「知ってもらう」というのはブランドのように知名度を上げることではなく，美郷町の多くの人々に生薬への興味を持ってもらうことが地域に根付かせる大切な方法であると考えました．そのため，ポスターづくりに集中しました．

（生物生産学科女子）

B さん：質問する勇気を獲得

この集中講義では，住民へのインタビューやチームでの発表があると聞き，誰かの話を聞いたり，質問したりするのが苦手な私は，とても不安でした．ですが，ワークショップで自己紹介やインタビューゲームをして，どのように質問すれば良いのか，どうコミュニケーションをとるのかが少し分かるようになりました．

実際に，私は「まちづくり」チームの一員として質問することになりました．事前にいくつかの質問項目を用意し，「しっかりお話を聞かねばならない」を自分に言い聞かせてインタビューをしていたら，自然と次から次への質問が出てきました.「これを聞いたらいけないのでは…」「私が聞き逃したのかも…」とネガティブな私の心配が私の質問を邪魔していたのですが，今回,「質問してみないと相手の考えが分からない」し，聞き逃したのだとしても「確認の意味でもう一度聞くことは恥ずかしくない」と思えるようになったのです.

私たちの提案した案は，若者向けのまちづくり案であったと思います．ですが，美郷町も高齢者の割合がとても高くなっていますので，高齢者を主人公としたまちづくり案を考える必要があることに，後になって気づきました.

（アグリビジネス学科女子）

C くん：役割を与えてくれたチームに感謝

僕は，人との付き合いが不得意です．会話をとっさに考えるのが苦手で，あがり症で，異性と話すことも難しい．こんな自分について，社会に出てから生きられるのか，不安に感じています．今回，僕が「あきた地域学アドバンスト」を受講したのは，そんな自分を改善するためでした．チームでの会話，発表や討論などの技術は，社会生活を営む上で不可欠な要素であるからです.

最初に教室に集まったとき，僕の属する学科の学生がほとんどいないことに気づきました．案の定，ワークショップで自己紹介をするとき，声が出なくなり，チーム決めのときもよく分からないことを口走っていました．しかし，チームの仲間が僕のあがり症を理解してくれて，美郷町研修を遂行することができました．とりまとめのワークショップでも，チームの仲間に得意分野のあることが分かりました．僕は，比較的興味のあったインスタグラムの説明を分担しました.

僕は，この授業に参加して，自分の未熟なところやつめの甘さを思い知りました．その反面，仲間を信じて，自分にできないことは仲間に任せ，他の人がやらないことを自分が担うようにすれば，上手くゆくということに気づきました．ワークショップのチームに感謝しています.

（生物生産学科男子）

D さん：長期研修によって地域理解が促進

「あきた地域学アドバンスト」を通して，私自身が成長できたことが 3 点あります.

一つ目は，グループ活動の中で自分の良さを出していくことです．5 人で一つのものを作り上げて，最終的なゴールである発表に向かうという，今回のような講義を受講したのは初めてでした．地域の方々の期待に応えられるのかという不安もありましたが，チーム内に質問が上手な人，絵が上手な人，字が上手な人，時に和ませてくれる人が居てくれることが分かり，1 週間みっちりと同じメンバーで活動することによる，短所長所の発見やその中での長所伸ばしが，ポスターづくりに効果的であることを知れたことです.

二つ目は，美郷の素敵さを感じられたことです．私のチームは生薬を調査しました．「生薬って何だ」というところからスタートしましたが，研修終了頃には「生薬ってすごい，生薬には可能性がある，知らない人に早く伝えたい」と感じるようになりました．実際に，帰省した折，親や弟にも「生薬のすごさ」を熱弁してしまいました．また，他のチームの発表を聞いても，地域にはさまざまな宝があることを知ることができました.

三つ目は，今後の学習への意欲が生まれたことです．1 年次の「あきた地域学」では 1 日だけの現地研修ということもあり，それで終わりという感じでした．しかし，今回，3 日間の研修ということで，心配もありましたが，結果として地域を深く理解できたように思います．住民の方々と深くお話をさせていただくことができました．美郷町を再度訪問したいという気持ちにもなりましたし，他の町ではどのような特産物があり，それらを住民の方々がどのように守っているのかということを学んでみたいと思っています．今まで生まれなかった，継続して学習してみたいという意欲を自分の中に実感しています.

（アグリビジネス学科女子）

表 2　*受講後の学生アンケート結果*

（n＝15）

	とてもそう		まあそう		あまり	まったく	わからない	
A:「地域」を考える機会になった	14	93%	1	7%	−	−	−	
B:新しい何かを気づかせてくれた	11	73%	4	27%	−	−	−	
C:住民交流は有意義であった	14	93%	1	7%	−	−	−	
D:地域活性化の必要を感じられた	11	73%	4	27%	−	−	−	
E:地域の元気づくりに貢献したい	8	53%	7	47%	−	−	−	
F:「チーム協働学習」は意味があった	13	87%	1	7%	−	−	1	7%

E さん：提案することの難しさ，
しかし大切なこと

今回の講義を通して，美郷町という地域への理解を深めることができた．今回のように，実際に調べて，歩いて，見て，触れて，食べてという五感を使った体験は初めてであった．

私は「観光チーム」であったが，一つひとつ現地の人と話をし，自分たちで見て，メンバーが持つ意見を共有できたことで，ポスター制作に生かせたのではないかと思う．自分の意見を積極的に言い，相手の意見にも耳を傾けるというチーム単位のポスター制作という過程が，自分の人生にとってとてもよい経験となったと感じる．

私は，「地域」とはそこに住む人達や風景，資源のすべてが地域の一部であり，魅力であると考える．集客目的のイベントや施設を整備することではなく，住民を中心にいろんなことが一緒に変化していくことで，地域は変わり，異なる特徴になると思う．住民の気持ちを変化させ，新しい提案をすることはたいへん難しいことであるけれど，意味あることであると感じることができた．

（生物生産学科女子）

受講後の学生アンケートの結果

最後に，15 名の履修生に対して，授業後に学生アンケートを実施しているので，その結果をみておきたい．

質問文は，A :「本講義は，「地域」というものを改めて考える機会になったと思う」，B :「本講義のようなキャンパスを離れた勉強は，新しい何かを気付かせてくれた」，C :「地域住民や関係者の方々との交流や対話は，自分にとって有意義であった」，D :「本講義を通して，地域活性化の必要性を感じ取ることができた」，E :「地域の元気づくりに貢献したいと考えるようになった」，F :「本講義が採用した「チームでの協働学習」は，意味あることであった」の 6 つである．それぞれに，「とてもそう思う」「まあそう思う」「あまりそう思わない」「まったく思わない」「わからない」の程度差の回答を求めている．

結果は，表 2 に示すとおり，いずれの問いに対しても肯定的な回答がみられる．特に，A :「「地域」というものを改めて考える機会になった」，C :「地域住民や関係者の方々との交流や対話は，有意義であった」，F :「「チームでの協働学習」は，意味あることであった」の 3 つの設問への回答をみれば，「とてもそう思う」が 90%前後と高率を示しており，本科目設計段階で構想した教育的効果は，おおむね達成されている．

Ｘ Ｉ．「あきた地域学アドバンスト」の教育的効果と課題

１．その教育的効果

上記の活動記録や学生の感想などをみれば，初めて実施した「あきた地域学アドバンスト」は，おおむね想定通りに実行され，以下のような教育的な効果を得ることができたと考えられる．

ちなみに，地域学への窓口という位置づけである「あきた地域学」は，地域情報の体系的な把握と日帰りの現地訪問による「地域」の体感を目標とするものであるのに対して，「あきた地域学アドバンスト」は次のような教育的意味を持っている．すなわち，

個別の地域社会に入り込み，住民とのコミュニケーションを通じて多様な地域情報の意味や重さを感じ取り，ワークショップ型授業によって具体的な解決策の提案を企図する，いわばあきた地域学の専門科目として位置し，現地探索への参画・聞き取りスキルの向上・ワークショップ手法の研鑽・プレゼンテーションのスキルアップの習得を目指すなど,「あきた地域学」以上の深みに触れることを目標としている．

4 つの構成要素である①美郷町訪問のための事前学修，②2 泊 3 日の現地研修（具体的な地域情報の収集と住民との交流),③地域情報を踏まえたワークショップとしての作品づくり，そして④成果発表会（プレゼンテーション）が，一つの科目の中で完結した．ここから導き出せる主な教育的効果として次の諸点を指摘する．

第一に,多くの市町村自治体の共通関心である「自治体レベルでの地域づくり」をテーマとしたことから，学生の「地域」への関心も高まった点である．すなわち，今日の市町村自治体は，なぜ地域づくり（地域振興，地域活性化）に取り組んでいるのか，その問題の背景には若者ないし若い世代の人口流失という問題が潜んでいることを知る機会となった．これは，先の構成要素のうち，①と②（事前学修と現地研修）によって，役場職員等との話し合いの機会が確保でき，彼らの語りに隠されたふるさとへの想いや地域活性化への情熱を知ることができ，地域づくりに対する学生の興味・関心が醸成されたといえよう．

第二に，ひとつ「地域づくり」といっても，農業面からのアプローチもあれば，観光面や住民の結束といった面からのアプローチもあることを今回の研修で学修した．さらに，深い情報収集と分析に基づかない解決策は陳腐なものにすぎないこと，そして地域住民の意見も多様に存在していてその集約は容易でないこと等，難しい課題があるにも拘わらず住民は自身のふるさとの衰退を危惧し，懸命なチャレンジを展開していることを知ることができたのである．構成要素の②と③と④（現地研修とワークショップとプレゼンテーション）において，この点を確認することができる．現地研修では，多面的なアプローチを想定した 3 つの地域づくりテーマを設定したこと，そして研修期間中の夕食後の 3 チーム間の情報共有の時間設定が利いている．また，ワークショップでは，3 つのチーム内及び間で，各テーマに即した課題群の把握と，住民目線に配慮した象徴的構図づくりを通して，訴求スキルを身につけることが可能となった．プレゼンでは，抑揚のあるスピーチ，他チーム発表の傍聴による比較の目，住民からの質問に対する応答力を習得することができた．

第三に，本科目の全体的な遂行に関与した立場から，すなわち 4 つの構成要素全体を通して，学生の授業への参加意欲が高いことを指摘しておきたい．学生の何人かに尋ねてみると，日頃から地域づくりに関心を寄せていると話す者も多く，理系の大学にもかかわらず，1 年次の「あきた地域学」をはじめ学内外において地域へのまなざしが向けられていることが推測される．

授業初回時には，大人しい印象を受けた学生らであったが,本科目遂行の中で学生の成長がみられた．地域住民や役場職員との交流・対話において従来のキャンパスでの講義とは違うコミュニケーションの必要性を自覚化するとともに，ワークショップのなかで，話すという行為だけでなく書く行為をも通じて，自らの考えを表出することがトレーニングになり，またチーム内での頻繁な討議を重ねることによって，本科目の中盤からは口頭での意見交換にも臆せず参加できるようになっていたことが指摘できる．

２．その課題と対応策

本科目の継続的な運用にあたり，課題となる点も少なくない．そのいくつかを指摘しておきたい．

第一に，本科目は大学内部で完結するものではなく，研修先地域自治体との連携によって質保証がおこなえるという特性についてである．

現在,「あきた地域学アドバンスト」の提携先として，美郷町と三種町の協力を得ている．今年度は美郷町研修を実施し，次年度は三種町研修となる．この繰り返しにより，現地における学修の場の継続性を担保している．

とはいえ，市町村役場の負担は少なくない．複数回にわたる事前打ち合わせでの研修計画の策定作業,

現地研修（3 日間研修）での現地案内などに大きく関与してもらっている．企画財政課を中心に多くの役場職員の支援・協力を得ている．継続的な協力関係を維持するためには，現在取り結んでいる秋田県立大学と美郷町及び三種町との包括的連携協定の内実の，なお一層の強化を図ることが重要になる．

第二に，ワークショップに関係した課題である．まずチームの規模の面をみる．今回のワークショップでは，5 名というグループ人数は適正と感じられ．6 名以上になるとチームが 2 つに分かれる等，チーム内責任が分散される傾向がある．意見の多様性を保ちながらまとまりのあるチーム活動になるためには，1 グループ 4～5 名が良い．

チームのメンバー構成については，チーム編成等のところで記したように，普段から親しい仲間同士で集まってしまうと，新たな視点が生まれにくく馴れ合いが生じる場合がある．普段とは違う顔ぶれや異なる学科でチームを組んだ方が，初めはよそよそしさがあるが，良い緊張感を持って協働作業に臨め，違う視点からの刺激や学びが生まれやすく，作品制作にも良い影響を及ぼす，と考えられる．

しかしながら，本科目は選択科目であることから，次年度の履修者数を想定することは難しい．大人数になった場合，適正規模の維持は同伴スタッフの増員要請を引き起こしかねない．ワークショップにおけるチーム編成について，改めて検討する必要が生じる．

第三に，ポスター制作における時間確保の問題である．今回のケースでは，ポスター制作に想定以上の時間を要した．この問題の背景には，手書きポスター制作が今の学生に向いているのか否かという問題と，学生による作業時間を充分に見通しているか否かという問題の 2 点が含まれている．

前者についていえば，普段スマートフォンやパソコンなど，ＩＴ機器での文字化やプレゼンテーションに馴染みのある学生にとって，手書き表現というアナログな作業は想定以上に難しさが伴ったようである．ポスターの制作方法については，5 日目の冒頭でサンプルを掲示し，口頭で説明をおこなったが，制作イメージが充分に伝わりきれていなかった面も垣間見られた．授業の初回の段階で，ポスターのイメージを強く提示し，ポスターに載せる必要項目について紙で配布するなど早い段階での情報提供が必要だったかも知れない．

数名の学生から，発表時にスライドや動画を使用できないか打診があった．今回は，最終回のタウン・ミーティングでのポスター発表や，翌月に開催される美郷町フェスタでの活用（ポスターセッション）を視野に置いていたため，手書きポスターに限定せざるを得なかった．しかし，提案内容によってはポスターよりもスライドや動画を用いた方が効果的に伝わるケースもある．今後、この点の検討が必要であるかも知れない．

ただ，電子機器活用に移行した場合，アナログが持つ利点，すなわちメンバー間で身体が触れ合いながら，模造紙を前に制作作業することによる協働性や共感性が希薄化する可能性，作品の多様な場所での展示可能性がそがれるという点も指摘できよう．

後者について，作業時間の見直しの問題を考えておきたい．今回，5 日目と 6 日目に，ポスター制作の時間を確保していた．しかし，現地研修で得た情報や発表内容の確定などの企画案構想に，その 2 日間のうちの多くの時間を割いてしまった．現地研修の各段階でチーム毎の振り返りをしているのであるから，秋田キャンパスでのワークショップにおいて企画案構想に要する作業時間の見直し・縮減によって，ポスター制作の時間を確保するという工夫も改めて検討せねばならない．

第四に，指導スタッフの体制整備の課題である．今回，現地研修の充実した遂行を目指して，2 人を現地指導講師として迎えた．県内の地域づくりを支援する NPO 法人の専門家である．学生の各チームに張り付いていただき，住民等への聞き取り調査に際して，適宜指導を得ることができた．ただ，今後，履修者数の変動を視野に置くならば，どのような人的配置が不可欠であり適正であるのかについて答えを探らねばならない．しばらく経験を積むなかで最善のあり方を探していきたい．

また，これに関連して，支援スタッフとして，TA（ティーチングアシスタント：院生）や PT（ピアチューター：先輩学部生）を配している．これの貢献度についても，今後経験を重ねるなかで適正化を考

える必要があろう．

第五に，2 泊 3 日という現地研修の時間量の適正化の問題である．今回のケースでは，現地研修の後半から学生の疲労と若干の能率低下がみられた．現地研修の各時間にかなりゆとりを持った構成になるように事前に計画していたのであるが，そのゆとりが逆に時間を余らせる結果になり，何をして良いのかわからず無駄な時間になるという問題を生んだ面もあった．

チーム毎に同伴している担当教員が，その余った時間をうまく活用するとうことも検討せねばならないが，もう少し広い視野から現地研修の日数を 2 日間に収める，または 3 日間の現地調査後に 1 日休息日を設けるなど，スケジュール改善に向けた対策も考える必要があろう．

いずれにせよ，今回初めて実施した「あきた地域学アドバンスト」について，上にみたような教育的効果のなお一層の向上に向けて改善を図るとともに，課題として浮かび上がってきた諸問題の克服を試みなければならない．さまざまな検討や工夫を重ねながら，この新設科目の，想定している教育目標に近づけていきたい．

最後に，本論考は執筆者 2 名の共同に拠るものであるが，主な執筆分担を示しておきたい．Ⅰ．Ⅱ．Ⅸ．Ⅹ．ⅩⅠ．は荒樋が主に担い，Ⅲ．Ⅳ．Ⅴ．Ⅵ．Ⅶ．Ⅷ．ⅩⅠ．は稲村が主に担当した．

平成 30 年 11 月 30 日受付
平成 31 年 2 月 10 日受理

The Feature of “The Akita Advanced Study Area” of Akita Prefectural University

Towards the university which took root in the area

Yutaka Arahi [1], Risa Inamura [2]

[1] *Department of Agribusiness， Faculty of Bio-resource Sciences， Akita Prefectural University*

[2] *Faculty of Bio-resource Sciences， Akita Prefectural University*

This paper considers as its subject “the Akita area study advanced” which started during the 2018 fiscal year at university. This is placed as the core-like subject of “Course of the Akita area study” by which fiscal year 2017 was established. To raise student's interest in the area, and to notice charm in local society are an educational target of the subject. This is a unique subject that consists of four elements: a lecture, fieldwork training, the workshop teaching method and presentations. The main features of this are as follows: to put the field survey on the 3rd 2 nights, to do poster production built as a workshop, and to create a presentation of a results report into effect for a local resident. The educational possibilities and potential problems with this subject are considered based on student participation in activities and student reports after attendance during the course of this paper,

Keywords: Akita area study advanced， Course of the Akita area study， Fieldwork， Teaching method using the workshop

Correspondence to: Yutaka Arahi， Department of Agribusiness， Faculty of Bio-resource Sciences， Akita Prefectural University， 2-2 Minami， Ogata-Mura， Minami-Akita-Gun， Akita 010-0444， Japan． E-mail: arahi@akita-pu.ac.jp